



書評のページ

『週刊 エコノミスト』リレー書評「歴史書の棚」 (2007年上半期)

以前からいくつか書評を寄せていた『週刊 エコノミスト』誌が、2001年6月の大判化を機に、「歴史書の棚」というリレー書評欄を設けた。日本史・現代史・東洋史・西洋史の順番で、それぞれ月に2冊の歴史書紹介をするということで、私はその「現代史」を担当することになった。引き受けるさいの条件に、販売終了後に本HP書評欄に収録することをお願いし、編集部了解を得た。

加藤

哲郎 (一橋大学大学院社会学研究科教授)

『エコノミスト』「歴史書の棚」

(現代史) 書評

「敵性人」の体験こそが 知の巨人のルーツだった

鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創 『日米交換船』 (新潮社)

『コルナイ・ヤーノシュ自伝』 (盛田常夫訳、日本評論社)

昨年出た重厚な好著だが、うまくマッチングできずに、本コーナー用に積んだままだった2冊。

一つは鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創 『日米交換船』 (新潮社、2400円)。日米開戦半年後の1942年6月18日、ニューヨークからスウェーデン国籍のグリップスホルム号という大型客船が船出し、東アフリカのロレンソ・マルケス港に向かった。北米に滞在してい

た日本人外交官、ビジネスマン、研究者・留学生約千人が乗った。「敵性外国人」の帰国船で、途中ブラジルで中南米日系人400人も乗船、ロレンソ・マルケスで、日本から帰国する米国人らに乗せて到着した浅間丸、コンテ・ヴェルデ号と乗客を取り替え、ようやく8月20日に横浜に着く。いわゆる第一次日米交換船である。

そこに乗船していた鶴見から、加藤・黒川が「封印された記憶」を聞き出す仕掛けで、鶴見の語りは冴える。船内部屋割りは、駐米大使から密入国追放者まで6階級に分けられた。留学組の鶴見俊輔・和子、都留重人、武田清子らは船底4人部屋で、閉じられた空間での開かれた議論が、戦後『思想の科学』やベ平連運動の隠れた源泉となる。遣唐使から岩倉使節団の伝統を戦時帰国船が引き継ぐ逆説、鶴見との会話から透ける加藤典洋「敗戦後論」の原点、特に後半の黒川創による行き届いた史料分析・解説が貴重だ。

もう一つは、すでに書評も多く出た『**コルナイ・ヤーノシュ自伝**』（盛田常夫訳、日本評論社、4700円）。ナチス支配下で育ったユダヤ系ハンガリー人経済学者。戦後社会主義下で「反均衡」「不足の経済学」から体制変革の理論的基礎を拓いた異端の軌跡で、理路整然で明晰、数学的な乾いた記述だ。

だが博士の数式でも文学になる。数理経済学や政策科学の実用的読み方も可能だが、一度は社会主義・共産主義にあこがれた経験をもつ人々には、格好の内省の機会を与える。著者の「現実が理論と乖離していることが分かれば、理論を修正しなければならない」という一節にある種の葛藤を感じとれば、呪縛からの解放の程度がわかる。

鶴見もコルナイも知のノマド＝遊牧民で、真の愛国者でもある。

（『エコノミスト』2007年2月27日号掲載）

6者協議で枠づけられた、在日の歌姫の悲願の行方

チョン・ウォルソン（田月仙）『海峡のアリア』（小学館）

船橋洋一『ザ・ペニンシュラ・クエスション 朝鮮半島第二次核危機』（朝日新聞社）

年が明けても北朝鮮問題の糸口は見えない。日本にとっては拉致問題が懸案だが、国際的

には核保有問題が加わり、いっそう難解になっている。

『海峡のアリア』（小学館、1500円）の著者チョン・ウォルソン（田月仙）は在日コリアンのオペラ歌手、兄4人はいわゆる帰還事業で北朝鮮に渡った。1985年に北朝鮮の芸術祝典で、94年に韓国のオペラハウスで、2002年ワールドカップ日韓共催時には当時の小泉首相と金大中大統領の前で歌った。その半生は哀切の物語だ。

東京・立川の在日朝鮮人活動家の家に生まれ、朝鮮学校で日本語も朝鮮語も学んだ。大好きな音楽に才能を発揮し、ピアノと西洋音楽に魅せられた音大志望の少女は、高校時代に父の会社が倒産し試練に立つ。弾き語りのアルバイトで勉強を続けたが、朝鮮高校卒には資格なしと受験を拒否され、唯一認められた桐朋学園へ。二期会からプロの声楽家としてデビュー、そこに朝鮮総連からピョンヤン音楽祭への招待で、兄たちと四半世紀ぶりに再会。だが北に渡った兄たちは、想像を絶する悲惨な境遇にあった。持歌「高麗山河わが愛」「イムジン河」のDVDを聞きながら読むと、いっそう心に響く。

こうした悲劇は、在日コリアンの多くも韓国・日本等の拉致被害者家族も共有するが、北朝鮮にとっての「戦争」は60年も続いている。国際関係のジグゾーパズルから6者協議の枠組が設定されたが、拉致被害者の慟哭や脱北者の悲惨は議題にするのも難しい。

そんな複雑なパズルを解きほぐすのが、船橋洋一『ザ・ペニンシュラ・クエスション 朝鮮半島第二次核危機』（朝日新聞社、2500円）。750ページにぎっしりと6者協議当事国の政策決定の裏面とメカニズムがつまっている。日朝共同宣言の陰の当事者ミスターXから米国ネオコン・アジア専門家、露中韓の要人・実務担当者に至る一人一人の思惑が個性的に描かれる。

米朝2者から10者まで数あるプランの中で6者協議に落ち着くパワーゲーム分析は圧巻。巻末インタビュー・リストで情報の精度がわかる。日本でもようやく生まれた、ジャーナリストによるハルバースタムばりの同時代史。

（『エコノミスト』2007年1月30日号掲載）